様式 12

博士論文要旨

関西福祉大学大学院 看護学研究科看護学専攻博士後期課程	学籍番号　8118101 氏　　名　草野　知美
論 文 題 目	自閉スペクトラム症のある子どもに特性や診断名を伝える母親の体験とその過程を支援するアセスメントツールの開発

Ⅰ　目的

近年，知的障がいのない自閉スペクトラム症(以下 ASD)のある子どもが，抑うつ，適応障害などの精神症状を呈し，入院に至るケースが見られ自己肯定感が低いのではないかと推測された．肯定的な自己理解が行える支援が求められている．子どもの自己理解には，子どもがどのように特性や診断名を伝えられるのかが影響する．本研究では，親が子どもに特性や診断名を伝える過程の体験からその過程を明らかにし，必要な看護を検討するためのアセスメントツールを開発することを目的とする．

Ⅱ　方法

研究 1:ASD のある子どもの親及び子どもへの告知に関する研究に焦点を当て国内文献により検討を行う．

研究 2：ASD と診断（又は疑い）を受けた子ども（11 名）に特性や診断名を伝えた経験がある母親（10 名）に半構成面接を行い，質的記述的に分析する．

研究 3：研究 2 の研究結果を基に『アセスメントツール試案』を作成し，病院で ASD のある子どもへの看護経験のある看護師 7 名、地域で看護経験のある看護職 2 名にインタビューを行い，適切性を検討する．その結果を基に『特性・診断名を伝える過程で揺らぐ母親を支えるアセスメントツール』を作成する．なお，本研究は，関西福祉大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号 30-0218）．

Ⅲ　結果

研究 1：親は子どもの診断名を告知される際，心情を理解した対応，子どもの障害内容や発達状態，将来設計に役立つ具体的な情報提供を求めていた．また，ASD のある子どもへの特性や診断名告知に関する文献では，　1)子どもへの告知の実態，2)告知に対する親の思いや考え，3)告知による子どもへの影響について,研究が行われていた．子どもへの告知は小学生から高校生以上まで幅広く母親により行われていることが多かった．

研究 2：分析の結果，母親が特性や診断名を伝える体験は，【子どもの特性を受容することへの揺らぎ】,【社会生活に困難を抱える子どもとの直面】,【ありのままの承認と子どもへの提案】,【家族や周りへの調整】,【診断名の告知と葛藤】,【自立に向かう子どもとの並走】の 6 カテゴリで構成された．母親は子どもの診断を受けた時から【子どもの特性を受容することへの揺らぎ】を体験し，【社会生活に困難を抱える子どもとの直面】をし【ありのままの承認と子どもへの提案】,【家族や周りとの調整】を繰り返し行い，子どもに特性を伝えていた．この過程で【子どもの特性を受容することへの揺らぎ】で示された〈体験が共感され受け入れられることによる安心感〉,〈子どもとの信頼関係の実感〉を体験し，子どもの理解を深め，母親自身が理解される体験を積んでいた．母親は子どもに診断名を伝えることに葛藤しながらも特性や診断名を伝え【診断名の告知と葛藤】を経て，子どもが自分を理解し表現したり，親子で特性や思いを共有し進路を模索する子どもの姿に寄り添うなど【自立に向かう子どもとの並

※自署・押印
※2,000 字以内とする。

走】をしていた．看護職は，母親が特性・診断名を伝える過程のどの段階にあり，どのような体験をしているのか，母親の状況をアセスメントし支援する必要性が示唆された．

研究 3：使用者は，看護職とし，対象者は，ASD と診断（疑い）された小学生から高校生までの子どもの母親で，子どもに特性や診断名を伝えることに不安や困難を抱え揺らいでおり，支援ニーズのある母親とした『アセスメントツール試案』を作成した．そのツールの適切性の検討を行った結果，母親の状況を理解し支援するという視点と内容は適切であるという結果が得られた．一方，アセスメントの使用方法の明確化，アセスメント項目の抽象的な表現の変更，看護の追記修正などの必要性が指摘された．これらの結果を基に『アセスメントツール案』を作成し更に検討を行った．次に，対象者の条件を設定し『特性・診断名を伝える過程で揺らぐ母親を支えるアセスメントツール(確定版)』を作成した．

Ⅳ　結論

母親への面接結果から，はじめて母親による特性・診断名を伝える過程が明らかになった．この過程は，【子どもの特性を受容することへの揺らぎ】が基盤となっているため，特性・診断名を伝える過程を看護するためには，揺らぐ母親の状況を理解する必要がある．そのために，アセスメントツールを作成し，看護へ活用できることが明らかになった．今後，実際に ASD のある子どもと関わる看護職に『特性・診断名を伝える過程で揺らぐ母親を支えるアセスメントツール(確定版)』の使用を依頼し，有用性を検証し洗練することが課題である．また，母親自身が特性・診断名を伝える過程を知ることができるよう発展することで，子ども自身が特性や診断名を理解できるよう見通しをもって養育することが可能となる．更に，母親が自分の状況を理解し，自ら支援を求めることも期待できる．

主指導教員氏名　川西　千恵美

※自署・押印
※2,000 字以内とする。